

〈書評〉

土屋昌明編『東アジア社会における儒教の変容』

(専修大学出版局 2007年)

鈴木 健郎

本書は、専修大学社会科学研究所共同研究「東アジア世界における文化接触の諸相」(2003年度～2005年度)の報告書として編まれたものである。「東アジア社会」を、中国を中心とする冊封システムおよび漢字・儒教・律令制度・中国仏教などの文化要素を共有する一定のまとまりをもつものとして設定したうえで、儒教文化の伝播と受容の歴史における「変容」を問題とするが、単純な「変容モデル」への反省を伴う方法論を自覚的に採用した論考の集成である点に大きな特色がある。既成の「変容モデル」の問題点として、外部からの影響の過大評価、受容側社会を単一的にとらえる傾向を挙げ、「変容」プロセスにおける受容側の主体性と多様性を総合的・動態的にとらえると同時に、「流入」する文化要素自体(「儒教」)に潜在・内在する「変容」可能性を問題とすべきことが提起されている。歴史学・人類学・思想史・文学の方法にまたがり各地域の具体的事例を分析することで、「儒教」およびその「変容」が、実体的な一義性やステレオタイプに回収されない多様性を有することを示すと同時に、比較考察を可能とする基盤としての「儒教」が仮設的に浮かび上がってくるしかけになっている。本書所収論文は以下の五本である。

網野房子「豚と天神——朝鮮半島の巫俗と儒教の習合をめぐる一考察——」

仲川裕里「『両班化』の諸相と儒教——イデオロギーの社会的上昇機能と限界——」

巖基珠「東アジア三国における『剪燈新話』の存在様相」

前川亨「身体感覚としての孝——二十四孝と宝巻にみる孝の実践形態——」

土屋昌明「『理性の国』と文化大革命——梁漱溟における儒教の変容——」

網野論文は、これまでエリート／非エリート、男性／女性などの二項対立的な図式と重ねて論じられがちであった朝鮮半島における「巫俗」と「儒教」の関係を再検討する。二項対立的な理解枠組の歴史的形成過程を検討し、その結果を踏まえて、現代まで続く村落儀礼の分析を行っている。「儒教」的な儀礼とみなされてきた「酬祭」には「巫俗」的な要素が混合していることを指摘し、さらに供物の「豚」について、儒教の祭天儀礼に規定される犠牲という解釈と並列して、朝鮮半島古来の「巫俗」的な天神祭祀・祈雨儀礼と連続する可能性を検討する。様々な史料を検討しても限界があり、明確な結論は出ていないが、「儒教」的とされた儀礼の性格が自明でないことを示し、また二項対立図式の両領域にまたがる両義的な位置にある「豚」を突破口に図式自体を揺さぶる手法は、興味深いものである。

仲川論文は、朝鮮半島の社会におけるエリート層の呼称の一つである「両班」、それと密接に関連する「儒教」の二つの概念について、その多様性と歴史的な変遷をたどりながらパターン的な整理を行い、さらに「両班化」という概念についての検討と整理を行っている。歴史的な事実、歴史学界と人類学界における用語法のずれ、「両班」たる自己規定と社会的承認の問題など、重要なポイントが明快な構図で示されている。網野論文とともに、歴史学と人類学的手法を合わせて用いることで、「儒教」概念の自明性を再検討する方法を提示するものであるといえよう。

巖論文は、元末明初の学者である瞿佑の著した中

国の小説『剪燈新話』が、中国・朝鮮半島・日本においていかなる位置づけを与えられたかを比較検討する。中国では禁書とされ時代潮流とも合わずに忘れられていったこと、朝鮮半島では『剪燈新話句解』というテキストが作成され中国外交に使用される「吏文」の教科書として使用されたこと、日本では翻訳されて読まれながら物語の素材として利用され「怪談物」の創作へとつながったことが示されている。中国文化の「受容」の社会的文脈が朝鮮半島と日本でまったく異なっていることが、具体的なテキストを事例に説得的に示されているといえる。

前川論文は、中国儒教における「孝」の実践においては「身体性」が決定的に重要であると指摘する。親の「遺体」たる自己の身体を毀傷せず保全することが「孝」の実践であるという前提から出発し、「孝」の価値が絶対化されてその実現のためにあらゆる手段が正当化され、ついに自己の身体を毀傷して親への孝を実践するまでに至る過程に「弁証法的機制」を見出し、身体保全と身体毀傷の矛盾が、絶対化した「孝」の実践において止揚されるという構図を描く。「二十四孝」や「宝巻」の多数の文献を詳細精密に整理検討することで具体的な事例を示し、朱子学による理論的正当化や仏教の影響を経て、天地の法則・社会規範と同一化した絶対的な道徳として「孝」がエリート層のみならず社会の隅々にまで浸透していった歴史を提示し、中国近代化の過程における「儒教」との対決の困難さを示唆する。これと対照的に、江戸時代以降の日本における「孝」理解は、「身体性」よりも「精神性」に立脚したものであった結果、道徳を個人の内面に限定して社会規範と区別する近代社会と親和的であったことが論じられる。ドイツ系思想の概念枠の影響が強いが、構想は大きく論旨は明快であり、中国と日本の比較近代化論について重要な論点を提示する力作である。

土屋論文は、高名な儒家である梁漱溟が文化大革命中に執筆していた『理性の国』の内容を、現代的な価値判断からではなく、当時の中国社会の具体的な文脈の中で考察する。本人の書簡や日記、現在判明している文化大革命期の諸事件の日程と対照する

ことにより、執筆過程と記述の意味が高い精度で明らかにされている。激動する中国社会の現実の中に生きる梁漱溟が「儒者」として、観念遊戯にとどまらない現実的な実践として、革命・社会主義・毛沢東思想に「儒教」との整合性を見出そうとした実存的なあり方を通して、文化大革命期における知識人の位置と状況、近代中国における「儒教」の変容の一例が示されているといえる。一方で、梁漱溟の思想自体の普遍的意義や完成度についての客観評価も並行して行われればさらに深い論考になったと思われる。

現代の朝鮮半島の事例を歴史学・人類学的方法で扱う網野論文と仲川論文、中国で作成されたテキストの朝鮮半島および日本での受容と変容を論じる厳論文、「孝」を題材としながら中国と日本の比較へ論を進める前川論文、梁漱溟の著作を文化大革命期の具体的なコンテクストにおいて読解する土屋論文という本書の構成は、「東アジア世界」「東アジア社会」という多様な解釈の余地のある広範な概念に比して地域的限定性は免れないものの）朝鮮半島の事例の豊富、中国・朝鮮・日本を関連付けた比較の視点、現代中国に通じる問題への接続といった意味において、意欲的かつバランスの取れたものと評価することができるだろう。